

パリサイ人と取税人

ルカ福音書18:9-14

- 18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。
- 18:10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。
- 18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。
- 18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』
- 18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』
- 18:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 主イエスが、この（たとえ）を話されたのはなぜですか。
- (2) パリサイ人の祈りの何が問題ですか。なぜ義と認められなかったのですか。
- (3) 取税人の祈りが義と認められたのは、どんな信仰だったからですか。

【解説】

(1) ふたりの人が、祈るために宮に上った

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。
 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。(9-10節)
 祈りというのは、神との会話であり、神との交わりである。ところが、うっかりすると、神よりも他の人のことが気になり、神の御前にいるという意識が希薄になって、独り言の祈りになりかねない。だから、主イエスがここで教えておられるパリサイ人の祈りと取税人の祈りから、自分の祈りがどのようなものであるかをチェックしたい。
 この《たとえ》では、二人の人が祈るために神殿に行った。一人はパリサイ人であり、もう一人は取税人である。

(2) パリサイ人の祈り

パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。

①独り言の祈り

パリサイ人は神に向かって語っているようであったが、その実、自分自身に向かって祈っていた、つまり独り言であった。

私たちの祈りも、しばしば独り言である。神様に向かって語っているような言い方をしているが、その実、自分の言いたいことを言っているに過ぎないことが多い。神の臨在を意識することなしに祈る祈りは、独り言であって、神との会話としての祈りではない。

②パリサイ人の祈りの内容

パリサイ人が独り言をしていたということは、その内容から、よく分かる。彼はこう祈っている。

「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」

パリサイ人の祈りが「独り言の祈り」であったということは、他の人と自分とを比較していたことによく表れている。彼の祈りは、終始感謝であった。その点においては、彼の祈りは立派に見える。しかし、その実、祈りではなかった。祈りというものは神の御前に出ているのであるから、神と自分以外は目に入らないはずである。

「私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します」と言っている。

本当に神の御前に出たら、他の人と比較しているような余裕はないはずである。彼は「感謝します」と言っており、自分の願い事ばかり言っている人の祈りよりは、ましなように見えないこともないが、彼には自分の惨めな姿が目に入らなかった。



パリサイ人は、さらにこう祈っている。「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」

確かに一週間のうち二度も断食をするということは驚くべきことである。旧約聖書で定められている断食（身を戒める）は、年に1度だけであって、それは全国民の罪を償う日であった（レビ記16:29/第7の月の10日）。

さらに、《十分の一献金》もしていたわけであるから、確かに信者として立派である。しかし、それを主の御前に誇る必要がどこにあるのか。いくら多くの捧げ物をしたとしても、それが自分の誇りとなったら、それは決して主に喜ばれる捧げ物ではなかったということである。

《この取税人のようではないことを、感謝します》。少し離れて取税人が立っている。その取税人と自分を比べている。確かにパリサイ人は、人間の評価においては、偽ったことを言っていない。

この取税人のように、ユダヤ人でありながらユダヤ人が一番嫌うローマ帝国の役人の税金取り立ての下請けをやっている。取税人は、その仕事を引き受けると、様々な役得がある。自分の同胞からなんと悪口を言われようと、貪欲さが人一倍強い。「この世は金の世の中だ」という（お金第1の考え方）の人間が取税人の仕事を引き受ける。

パリサイ人は、「取税人のようではないことを、感謝します」と言っている。

(3) 取税人の祈り

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。

『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』(13節)

①目を天に向けようとせず

《遠く離れて立ち》というのは、体がみんなから遠く離れているということだけではない、心の位置である。取税人の心には誰も近くにいない。人が見えないほど遠く離れて立っていた。

《目を天に向けようとせず》。パリサイ人の方は天を仰いでいる。実に確信に満ちた祈りの姿である。しかしこの取税人は目を天に向けようとせず、上げることもできない。だれをも見る余裕もない。あたかも神様に全然向かっていないようである。胸をたたいて、罪にまみれたどうしようもない自分自身を見ているようである。

パリサイ人は神様に真っ向から向かって堂々と祈っているように見えるが、その内容は全然神に向かっていない。人に向かっている。自分に向かっている。

この取税人は、神に向かっていないかのように見える。彼には他人は見えない。罪に悩むところの自分だけである。どこへ行く場もない、罪の姿そのままにただ神に向かって叫ぶ。お祈りなんていうものではない、呻き、叫びである。あるがままの罪の実体をもって、ただ神に叫ぶ姿、《神さま。こんな罪人の私をあわれんでください》と、ただ神様にあわれんでいただくしかない姿がある。

②救いの根拠は十字架にあり

「あわれんでください」のギリシャ語原語は「ἰλάσκομαι (ヒラスコマイ)」という言葉である。これと同じ言葉が使われているヘブル書2章17節を見ると、

「そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです」

この《なだめがなされるため》と訳されている言葉が同じ言葉である。この言語の意味から、取税人が神に向かって叫んだこの叫びの意味を考えれば、よく分かる。

「贖う、償う」あるいは「なだめの供え物となって下さい」という意味である。イエス・キリストは十字架にかかって、私たちの罪のために「なだめの供え物となって下さった」。神の怒りは、一点の怒りも残さず完全に償われた。

③神様が満足して下さる信仰

取税人は、自分の罪をどうしようもない。このまま罰せられるしかない、永遠のゲヘナの火に投げ込まれるしかない。あるとすればただ一つ、それは神様、あなたの（あわれみ）だけですと、ただ神様に頼むことである。被害者である神様の側に、厚かましくも、加害者である私の罪を償っていただくしかありません。（神のあわれみ）を願う叫びである。

罪人はただ（あわれみ）を受けるしかない。どうぞあなたの贖いのみわざによってこの罪を償って下さい、という叫びは、神の側で立てられた贖いのみわざ、イエス・キリストの十字架のみわざに、飛び込んでいくことである。

「こんな罪人の私をわれんでください」という事態が、神の側でなされた救いの道、十字架を、そのまま無条件に受け取る姿である。

自分の側に、救いの根拠となるものはひとつもない、全部神様の側にかかっている。神の側のみわざにおいてだけ、私たち罪人は救われる。それ以外のどんな事によっても、この罪人は救われることのできない者である。

この取税人は、キリストがいなければ、どうにもならない存在である。私の救いの根拠はイエス様、あなたとあなたの十字架だけですよという、これが「こんな罪人の私をあわれんでください」という叫びの中にある。自分の全存在をあげてイエス様を信じている姿。それが神が遣わされた者を信じるという信仰、神が満足なさる信仰である。

(4) 神に義と認められたのはどちらか

あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。

なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」(14節)

主イエスはお自分の話を聞いていた者たちに、「このようなへりくだった心、悔い改めた心が神に受け入れられるのだ」と言われた。見かけで判断する場合の結果と違って、《義と認められて家に》帰ったのはこの取税人であった。